

博士論文（要約）

芸術家アルフォンス・ルグロの静かな闘い  
－19世紀英仏芸術運動における「リアリズム」の行方

安藤智子

本論では、19世紀フランスに生まれイギリスで活動した芸術家、アルフォンス・ルグロ(1837-1911)について言及する。ルグロは英仏の芸術運動のなかで新しい絵画を探求し、イギリスにおいて近代フランス芸術の普及に努めたその革新性を考察することを本論文の目的とする。

ルグロは、エドゥアール・マネやジェイムズ・アボット・マックニール・ホイッスラー、アンリ・ファンタン＝ラトゥールらとともに、ギュスターヴ・クールベのリアリズムの洗礼を受けた若きリアリストとして、1860年頃からパリの画壇で活躍している。1863年にはホイッスラーの勧めでイギリスへと渡り、ロンドンのスレイド・スクールで教授を務め生涯をイギリスで送る。

ルグロの絵画には、主に地方の民衆が祈る姿や、教会で修道士が聖務を行う場面が描かれ、丹念で精緻な描写、そして浅い絵画空間と暗い画面が特徴的である。先行研究でルグロは、過去の巨匠の造形様式に倣った折衷的な側面のみが指摘され、早い時期にパリの前衛的な芸術から離れてしまった画家として位置付けられてきた。このような過去のルグロ像に対し、筆者は二つの観点から画家の再評価を行った。

第一は、リアリズムの系譜にある宗教風俗画を描く画家としてのルグロである。

1861年のパリのサロンでは、森の片隅で粗末な磔刑図に跪き祈りを捧げる田舎の女性たちを描いた《エクス・ヴォト(奉納画)》(1860年制作、ディジョン美術館所蔵)を発表し、この作品は生涯において最も議論を呼んだ。本論ではこの絵画を、ルグロの「リアリズム」の諸問題が先駆的に表れている作例として重点的に扱う。

この作品では、綿密な写実性のもとに人物の顔や手が描写され、同時代のリアリズム絵画の特徴が見られる一方で、人物のフォルムは簡略化され、女性たちは奥行きを浅い絵画空間に配置されている。このような画面は、当時の人たちには、反アカデミックな絵画様式によって「素朴さ」を意図的に創出し、また「現代生活の感覚」を表象していると受け取られた。さらにこの造形様式は、ルネサンス以前のプリミティヴな造形性が指摘され、初期フランドル絵画との共通性が見出されている。このようにルグロの絵画作品が、過去の絵画への回帰という懐古的な要素を強調しながら新しい絵画の方向性を示し、逆の時間軸を同時に内包するという19世紀後半の近代絵画の問題を早い時期に提示している。とくに幾何学的な遠近法に依拠しない絵画空間の構成は、先に挙げたルグロ周辺の若きリアリストたちの共通課題であり、彼らも現代的な主題と反アカデミックな造形様式との融合を試みている。

さらに《海の祝別式》(1872年制作、シェフィールド、グレイヴ・ギャラリー所蔵)は、英仏海峡沿岸のフランス北部の漁村に住む人々が浜辺の葬礼に参列している様子が描かれている。ここではより複雑な画面構成を用いて、地方の宗教行事が描写されている。この作品については、参列する民衆のなかの母子が中心的なモチーフであり作者の愛国心が描出されていると当時の美術批評で指摘されている。またこの絵画の主題がフランスの地方の宗教行事であることから、「地方主義(リージョナリズム)」に通底するナチュラリズムへの移行期の作品とも捉えられる。しかし人物の象徴性と画面構成の人工性は、目前の状況を再現するナチュラリズムの傾向とは相容れない。さらにルグロとロンドンへ亡命してきた友人の芸術家たちの政治思想、及び1870年代前半のフランスの国情を背景として、画中の母子像の寓意性と特異な画面設定についての読解を試みると、この作品が共和派によるフランス共和国への支持を表明しているという解釈に導かれる。

つまりルグロの作品の中心モチーフの人物が典型化され、人物描写の写実性と象徴性が混在して特異な絵画構造が平面性を志向する点において、ルグロの絵画は他の同時代の様式との共通性が希薄であり、近代美術史の範疇に分類することが困難であると思われる。しかしその一方で、絵画主題の同時代性と造形様式の革新性を見出すことができ、ルグロ独自の「リアリズム」が認められる。

また第二の方向性は、ルグロを当時の芸術動向や芸術運動と関連付け、芸術家のグループの一員として考察することにある。

芸術家のグループのなかでの活動は、先述した若きリアリストたちとそろって1863年の落選者のサロンに作品を展示したことに端を発している。ルグロも《エドゥワール・マネの肖像》(1863年制作、パリ、プティ・パレ美術館所蔵)を発表し、マネとの芸術上の共感を表明した。

ルグロは1863年に渡英してからは、ラファエロ前派の画家たちとくにダンテ・ゲイブリエル・ロセッティやフレデリック・ワッツ、そしてフレデリック・レイトンといったイギリスの前衛的な画家たちと親交があった。ルグロはパリの画壇で話題となっていたマネやクールベの裸婦像からの影響を受けて、イギリスでもヴェネチア絵画が意識された女性ヌードの絵画が流行した時期に《キューピッドとプシュケ》(1864年制作、ロンドン、テイト・ギャラリー所蔵)において裸婦像を描き、ロイヤル・アカデミーに展示している。

とくに渡英後のルグロにとって転機となったのは、パリ時代に通ったオラス・ルコック・ド・ボワボードランのアトリエの旧友たちが、1870年初頭に普仏戦争とパリ・コミューン

を逃れてロンドンに亡命してきたことである。ルコックのアトリエの仲間たち、ジュール・ダルーやギョーム・レガメー、レオン・レルミットをロンドンに迎え、自分の支援者へ紹介し、彼らの作品を購入してもらおう。同時期に、共和主義への共鳴やフランスの国情を示す絵画を公の展覧会に発表し、その代表例が先の《海の祝別式》であった。

絵画作品にも表明されている共和主義への共感が、1870年代以降にルグロが属していた芸術家のグループとその支援者たちのサークルの根底にあったと考えられる。ルグロとルコックのアトリエの仲間との連帯感は、一つの芸術家グループを形成し、彼らはフランス共和主義に賛同するイギリスのコレクターや美術批評家たちの支援を得ている。当時の有力な国会議員で、フランスの共和主義を信奉していたチャールズ・ディルクの注文をルグロが受けて《レオン・ガンベッタの肖像》(1875年、パリ、オルセー美術館所蔵)を描いている。この芸術家がフランス共和主義の領袖であるガンベッタと大変近い関係にあり、芸術と政治の重なり場に作品制作があったことは特筆すべきことである。そしてルグロと仲間の芸術家たちが農民や漁民など労働に携わる人たちを形象したことも、彼らが共和主義思想を共有していたことを示している。

さらにルグロはイギリス在住のギリシア人コレクター、コンスタンティン・アイオニディスに対し作品購入について助言をし、コレクション形成に関与している。このコレクションの中心を占めるのが同時代のフランス絵画であり、ルグロはイギリスでのフランス近代絵画の受容に大きく貢献したと言える。

ジャン＝フランソワ・ミレーなどのバルビゾン派の絵画やエドガー・ドガの作品に加え、当時は無名であったルグロとその友人たち(ダルー、ロダン、レガメー、レルミット)の作品がルグロの勧めでアイオニディスのコレクションに入る。そのなかでも、ルコックのアトリエで一緒に学んだロダンの作品をルグロが仲介役となってイギリスで普及したことを重点的に論じた。ロダン作品の普及活動は、ルグロが人的なネットワークを活用し、作品展示と活字媒体での宣伝によって戦略に遂行されている。このことは、イギリスの体制側であるロイヤル・アカデミーへの異議申し立てという意味で、また共和主義思想に応えるべく、一般の人へ向けての美術教育という観点からも重要である。ルグロが教授となって行ったスレイド・スクールでのフランス的な美術教育も合わせて、ルグロは同時代の英仏美術交流において重要な役割を果たしたことを検証した。

このようにルグロは、作品上の主題においても、実際の芸術活動においても、同時代の社会状況と密接に関連し、とくに芸術と政治との接点において、ルグロの芸術活動があっ

たことは認識されるべき事実である。

以上のような考察を通じ、ルグロの「リアリズム」は、1860年初頭を起点とし、新しい絵画を探求する運動として前衛的な造形性を示し、共和主義思想で結びついた芸術家グループの一員としての活動であったと結論づけられる。

ルグロの絵画は既存の近代美術史の様式に括ることはできず、またルロックのアトリエの画家たちを中心とした芸術家グループやその活動には特定の名が付けられることもなく、ルグロの特異な芸術及び芸術活動は、近代美術史研究において看過されてきた。しかし本論において、これまで扱われることのなかった一次資料を発掘してルグロを取り巻く環境を再構築し、ルグロの絵画作品の意義付けや解釈を試みることによって、ルグロの芸術性と芸術活動の同時代性と革新性を新たに提示する。